

# 商業科・学校設定科目「アジアとビジネス」の実践報告

商業科 對崎 加奈子

商業科では、平成15年度より新科目「アジアとビジネス」を開講した。アジアを舞台とするビジネスの世界で活躍できる人材の育成を目指し、アジア地域の基本状況からそこで展開されるビジネス戦略まで幅広い学習を行っている。前年度紀要に科目開発に至るまでの経過・概要を報告したが、本紀要では実際始まった科目の実践報告を1学期と2学期に分けて行う。

キーワード：学校設定科目 アジア ビジネス 実践報告

## 1. 科目概要・科目の狙い

本科目は商業科で2年前から研究開発に取り組み、平成15年度より開講した学校設定科目である。既にビジネスのグローバル化は周知の事であり、現在は様々な国際的事象を契機としてアジアがもっとも注目される地域となった。そのアジアをメインに取り扱った商業科目は現在のところ無い。高等商業教育では「国際ビジネス」という科目において世界経済全般について学ぶものの、世界という広い範囲が学習対象となるためアジアはほんの一部を構成するにすぎない。しかし現況を考えると、今後社会に出て実際にビジネスに携わる高校生にとって、今、アジアを知り、アジアと日本の関わり方を学び、これからを考えることは大変重要な意味を持つ。そこで、アジア地域に対する理解を深めると同時に「アジアの中の日本」という意識を育て、今後ビジネスの主舞台となるアジアで主体的に活躍できる人材を育成することを目標に本科目を開発した。また、これまでの学習は、既にある一定の体系化がなされ結論の見えたことを理解する形式が主だったが、それだけでは主体的な姿勢は身に付かない。ビジネスという時代により変化し続ける生き物を教材に、ビジネスそのものを理解するだけでなく、自己の問題として捉え、解決し、未来を提案できる能力の育成もこの科目の目指す所である。カリキュラムは、1学期は「アジア経済の理解と語学学習」、2学期は「日本企業のアジア・ビジネスの展開方法」、3学期は「アジアの企業・これからのアジア」という3部構成になっており、授業は週2単位、講義・実習・課題を織り交ぜた大学のゼミ形式に近い形で展開している。本科目については、前年度紀要でその趣旨及び授業案を示した。今回は実際に平成15年度4月から11月（1学期・2学期）に実施した授業内容を報告すると共に、生徒へのアンケ

ート調査を踏まえて授業内容を検討していきたい。

## 2. 年間授業計画

今年度実際に行った授業計画は以下の通りである。

【1学期：アジア経済の理解と語学学習】

| 回  | 日付   | 内 容  |
|----|------|--|
| 1  | 4/15 | ・授業ガイダンス<br>・アジアを知る～基本知識・地理編～                      |
| 2  | 4/22 | ・アジアを知る～転換期編～<br>・グローバル化するアジア<br>～アジア通貨危機がもたらしたもの～ |
| 3  | 5/ 6 | ・中国の変貌～アジアの民主化～                                    |
| 4  | 5/20 | ・アジア経済のカタチ   |
| 5  | 5/27 | ・アジアのIT革命  |
| 6  | 6/ 3 | ・アジアの抱える安全保障問題                                     |
| 7  | 6/10 | ・アジアの言語  |
| 8  | 6/17 |  |
| 9  | 6/24 | ・英語学習  |
| 10 | 7/ 1 |  |

【2学期：日本企業のアジア・ビジネスの展開方法】

| 回  | 日付    | 内 容                            |
|----|-------|--------------------------------|
| 11 | 9/ 2  | ・日本企業のアジア進出①戦前～1960年代          |
| 12 | 9/ 9  | ・日本企業のアジア進出②1970～1990年代        |
| 13 | 9/16  | ・ケーススタディ I                     |
| 14 | 9/30  | ・日本企業のアジア進出③新しい経営戦略            |
| 15 | 10/ 7 | ・ケーススタディ II                    |
| 16 | 10/14 | ・調査研究1-1<br>アジアに進出した日本企業の調査・分析 |
| 17 | 10/21 | ・調査研究1-2                       |
| 18 | 10/28 | ・調査研究1-3                       |
| 19 | 11/ 4 | ・調査研究1-4                       |
| 20 | 11/11 | ・調査研究発表会                       |
| 21 | 11/18 | ・各国の労働事情                       |

この一覧表は4月当初の授業計画によるものであり、途中授業時間の変更や進度の都合により内容が一部変更になっている。その点に関しては、以下の学期ごとの授業報告と合わせて適宜示す。

### 3. 授業報告 1学期

1学期（4月～7月）は、まずアジアそのものを理解することを目標に「アジア経済の理解と語学学習」という章を設け、計10回行った。

第1、2回ではガイダンス及びアジアを知る～基本知識編・地理編・転換期編～を扱った。具体的な内容は、導入として生徒がよりアジアを身近に感じ興味・関心を抱きやすいよう、各国の基本データを一覧表にしたプリントを穴埋めする実習及び白地図を利用し地理的な観点からアジアを見る学習等、作業を伴う形で行った。

第3回から7回にかけては、アジア全般の動勢・問題点を学び理解することを目的に、アジア経済、アジア通貨危機、中国の躍進、IT革命、安全保障問題といったアジアを知る上で重要なキーワードに関する講義を行った。途中第4回の「アジア経済のカタチ」において、世界の地域的経済圏とアジアの地域的経済圏を比較検討するという実習を組み込んだ。EUやNAFTA、ASEAN等の参加国名と世界各国のGDP一覧を配布し、自分でそれら地域的経済圏の総GDPを計算後、表計算ソフトを利用してグラフ化・分析するというものである。実習は当初この2時間（5/20の授業）で終わるつもりであったが、生徒が思った以上に表作成に力を注いでいたため、次の5回（5/27の授業）の授業も引き続き実習を行いその結果を全員で講評しあった。ここで授業計画と進度がずれ、結果最後の語学学習が2回の実施となってしまった。

続いて7、8回とキーワードに関する講義をした後、9回にアジアの言語学習を行った。現在アジアには38の国があり、それぞれで異なる言語を利用している。アジアでEUのような地域的経済圏を形成することが困難な理由の1つは、こうした環境基盤の違いにあるといわれている。しかし、一方で言語はその国固有のものであり財産であるといわれるほど重要なものだ。それらに簡単ではあるが触れることによって、多民族の集合体というアジアの特質をより認識できると考える。とはいうものの、当然授業担当者にとって言語は専門外である。そこで教えるのではなくみんなで学ぶ形式の授業にすることを思いつき、実習を行うこととした。この実習は、後に示すアンケート結果からわかる通り、1学期の授業にお

いてもっとも生徒の評価が高かった内容である。実習は、生徒一人一人に1国を割り当てその国のもっとも基本的な会話である「こんにちは。私は〇〇です」という挨拶文を調べるといものである。インターネットを利用して言葉を調べた後、その結果を一覧表にまとめみんなで声に出して読みあった。クメール語やウルドゥ語といった馴染みの薄い言語も含まれており、実際どれくらい調べられるか不安であったが、何とか全員調べることが出来た。

残りの10、11回は英語学習を行った。先に示した理由により、アジアビジネスで利用される主な言語は、やはり英語である。本校では開講していないが商業科目には「英語実務」という科目があり、ビジネスで使用する文書の作成、簡単な英会話を学習する。その科目内容を参考にしつつ、今回は2回という短い時間のため、あまり難しい内容にはせず英語に慣れることを目的にアジアビジネスに関するニュース記事をインターネット上で探しそれを読み、自分の考えを英語でレポートにまとめるという実習を行うこととした。英語科の授業とは違うため、それほど文法にはこだわらず、すんなりとレポート作成に入れるよう書き出しの言葉をあらかじめ示した。例えば、「このレポートの内容は～であった」という文は「It was written to this report that ～」という書き出し部分を示し、生徒は自分の言葉でthat以下を埋める。当初は英語なんて全然出来ない！と諦め気味の生徒も見られたが、正しく伝える以前にいいたいことをいう勉強であることを強調したところ、生徒は辞書と格闘しながらも何とか自分の考えをまとめようと頑張っていた。本当は最後にレポートを発表する場を作りたかったが、残念ながら授業時間が足りず提出のみで終了してしまった。これは今後検討が必要と思われる。

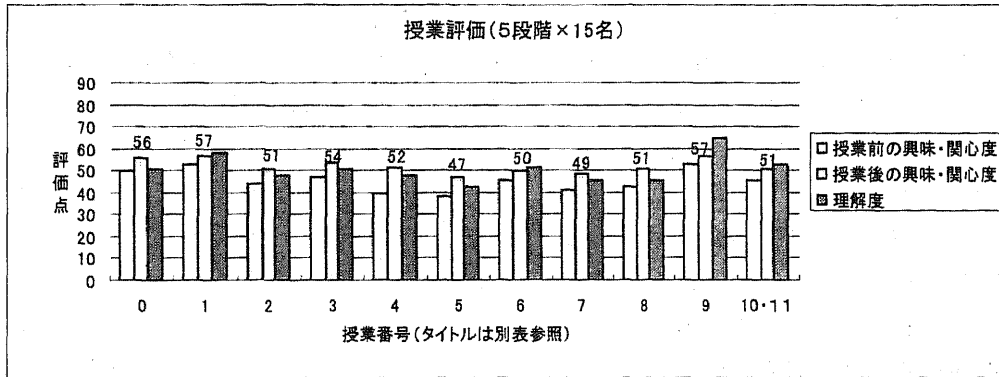
以上が、1学期に行った授業の実施内容である。次にそれに対する生徒のアンケート調査の結果を示す。

### 4. 1学期授業に対するアンケート結果

まず1学期の各単元ごとに授業前・後の興味・関心の程度及び内容の理解度について、5段階で評価をしてもらった。その数値を単純に集計し、各単元の評価点とした。サンプル数は15名、よって平均点は45点となる。この結果、授業前は平均に満たない興味・関心の度合いが、全ての単元について授業後数値が高くなっていることがわかる。とりわけ授業番号4、5、7の単元は、中国・経済・ITというキーワードが敬遠され、興味度は低かった。しかし別のアンケート項目「もっとも楽しかった

授業は？」では、授業番号1, 9に次いで、7を挙げた かった。  
生徒が多数いるなど、学習を経て関心を養ったことがわ

【アンケート結果1：授業評価】



＜授業タイトル表＞

| 授業番号  | 授業タイトル           |
|-------|------------------|
| 0     | ガイダンス            |
| 1     | アジアを知る～基本知識・地理編～ |
| 2     | アジアを知る～転換期編～     |
| 3     | グローバル化するアジア      |
| 4     | 中国の変貌～アジアの民主化～   |
| 5     | アジア経済のカタチ        |
| 6     | 実習：GDP計算・表処理     |
| 7     | アジアのIT革命         |
| 8     | アジアの抱える安全保障問題    |
| 9     | アジアの言語           |
| 10・11 | アジアの言語           |

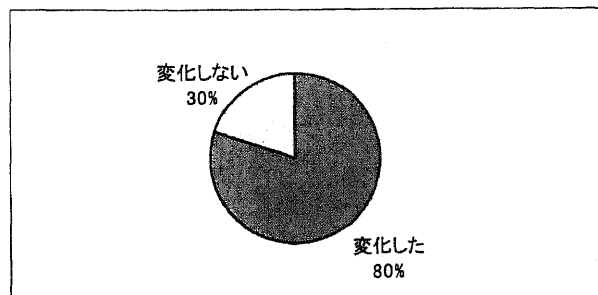
- ・それまでは聞き流していたアジアのニュースを注意してみるようになった
- ・日本の事もあまり知らなかったのに、アジアと日本を詳しく歴史からみる事ができ興味が持てた
- ・今までそんなに深く学んだことがなかったから、新しい部分を知ることが出来た
- ・経済成長の過程があって今があるんだということがわかった。ビジネスは人と人のつながりが大事であることがよくわかり面白かった

反対に変化しなかったと答えた生徒の理由は以下の通りである。

- ・内容が難しすぎてなかなか理解ができなかった。覚えることや単語が多すぎた
- ・内容があまり身近ではない

次に、受講する前後でのアジアに対する興味・関心の変化についてアンケートを行った。結果2にあるよう、それに対しては以下のような結果が得られた。

【アンケート結果2：受講後アジアへの興味・関心は変化したか】



この科目を受講したことでそれ以前に比べてアジアに興味を持つようになったと答えた生徒がほとんどであった。その理由は次の通りである。

授業者として反省することは、用語の精選が不十分のために生徒が難しいという印象を受け、興味を削いでしまった部分が多少あったことだ。また、身近でないという意見はアジアの中の日本という意識がまだ定着していないことの現れである。真摯に受けとめ、今後はできるだけ内容をかみ砕き本当に必要な知識をわかりやすく提供できるよう、研究を重ねたいと思う。

以上のような、生徒の意見を反省材料として2学期の授業を組み立てた。その内容は次に示す通りである。

5. 授業報告 2学期

2学期(9月～11月)は、1学期に学んだアジアの基本的な知識・理解をもとに、いよいよビジネスの学習に入った。「日本企業のアジアビジネスの展開方法」を学ぶことを目標に、まず第11回から15回にかけて日本企業のアジア進出がどのように行われたか年代別に講義した。途中13、15回で、より明確にアジア進出の形を理解できるよう、具体的な企業を一社とりあげケーススタディと

してそのビジネス戦略についてみた。学習に際して特に気を付けた点は、ビジネス戦略に対して生徒が難しいイメージを持たないよう配慮することである。経営学といった場合それは1つの系統だった学問であるが、それを高校生が限られた時間で理解することは困難である。またこの授業では経営ノウハウに熟知することよりも、将来ビジネスに携わった時直面した課題を乗り越える力を養う点にある。そのためケーススタディでは、ある企業がビジネス上で起きた課題をどう解決したかという点に注目して、戦略の分析を行った。こうして戦後から現在まで日本企業のアジア進出について学習した後、いよいよ16回から20回に渡る調査研究を開始した。

この調査研究は2学期のメインとなる内容で、生徒がこれまでの学習を踏まえて各自で日本企業のアジア進出の実際を調査、その結果に分析を加え発表するというものである。自分でアジア進出をしている企業を探しそのビジネス戦略の特徴を掴むことは非常に難しいが、この科目の目指す主体的な学習をする絶好の機会と思い、取り組むこととした。先にケーススタディを適宜盛り込んだと述べたが、それは生徒がこの調査研究の在り方をイメージしやすいよう行った側面もある。実習の導入時にそのことを十分説明し、これからの作業手順が見えるよう配慮をした。後に示すアンケート結果にある通り、生徒の反応は良く9割近い生徒が2学期テーマの理解に役立ったと答えており、こうした主体的な作業を伴う学習が理解を深めることに効果的であることがわかった。

また今回の実習の特徴は、発表会を重視したことにある。ビジネスに携わる者にとってプレゼンテーション技術はもはや必要不可欠な能力である。そうした現状を踏まえて、学校現場でも様々な形でプレゼンテーションが行われている。しかし教育におけるそれは往々にして成果の「発表」が多く、本来のプレゼンテーションの目的である「説得」が欠けていることが多い。そこでビジネスの視点から学習するこの科目では、ビジネスとしてのプレゼンテーション能力を重視することとした。従って実習への導入の段階で、改めてプレゼンテーションの方法について学ぶ時間を設けた。

以上のような導入をした後、各自での調査研究を開始した。生徒の主な研究手段はインターネットであったが、それ以外にもビジネス書を図書館で借りてきたり独自に資料を企業から取り寄せるなどして、多様な情報収集に努めていた。調査時間中は全く生徒の自主性に任せ、指導者の役割は調査中に出た難しい用語の説明や展開に行き詰まった時のアドバイスをする程度にとどめた。この

ような形で4回の調査研究時間を経た後、発表会を行った。

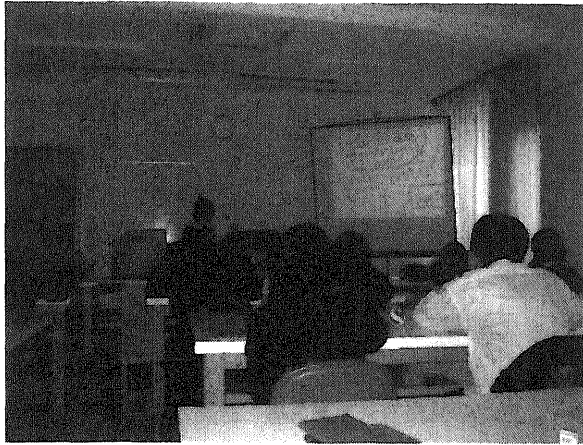
発表会は質疑応答を含め1人4分で、パワーポイントもしくは実物提示装置を使用、副次資料を提出することを条件として行った。またこの発表が2学期期末考査に該当するため、聞く側もそれぞれの発表に対するコメントと内容・プレゼンテーションへの評価をつける形式にした。最終的な発表内容は予想以上に深く調査されたもので、正直なところとても驚いた。高校生の力でどこまで情報収集ができ、そこから戦略を読み取れるのか不安であったが、指導者自身に発見がある程よく調べられていた。また偶然にも19名それぞれが違う企業を取り上げたため、より多くの事例を生徒は知ることができた。これも個人実習の大きなメリットの1つであるだろう。

しかし一方で、反省すべき点も多々ある。まず第一に、発表時間が短すぎた。考査を兼ねるため公平性を期して同じ授業時間内に納めようとした結果、一人一人の発表時間がとても短くなってしまい十分に調べた内容を伝えきれない生徒もいた。準備にかけた時間に対してプレゼンテーションの場が不十分であったことは、今後改善の必要がある。2つ目の反省点は、プレゼンテーションで重要な視覚効果の利用に関して、事前にきちんとした指導を行わなかったことである。そのため不必要な資料提示や情報量の多すぎる提示画面など初歩的なミスが目立った。今後はプレゼンテーションの方法を指導するだけでなく、視覚効果の利用についてもガイダンスをする必要がある。

この実習を終えた後、第21回各国の労働事情の講義を行った。これまでの授業で日本企業の進出については理解したが、それを受け入れ実際に労働力を提供する側、つまりアジア各国の労働事情はあまり扱っていない。授業を進める中で当然でてくる受け入れ国に対する疑問を解決するため、この内容を2学期の最後にもってきた。日本における労働について学習した後、世界との比較からアジア地域の労働事情を把握、それぞれの国で抱える労働問題について説明した。時間が1回しか取れずそれほど深く掘り下げることはできなかったが、3学期に行うフリーテーマによる調査研究においてこの部分を研究テーマとして取り上げた生徒が多数いた。次の学期への導入としては、ちょうど良かったかも知れない。

以上が2学期に行った授業内容である。次に2学期のメイン学習であった実習に対する生徒のアンケート調査結果を示し、考察を加えたい。

<発表会の様子>



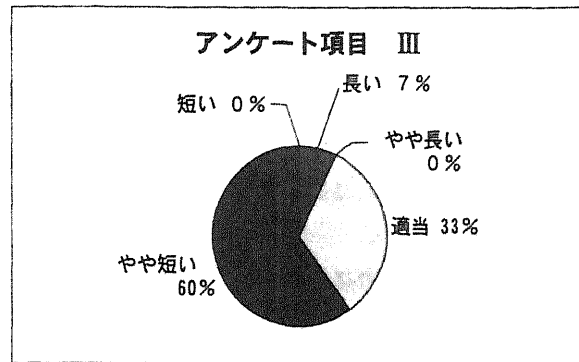
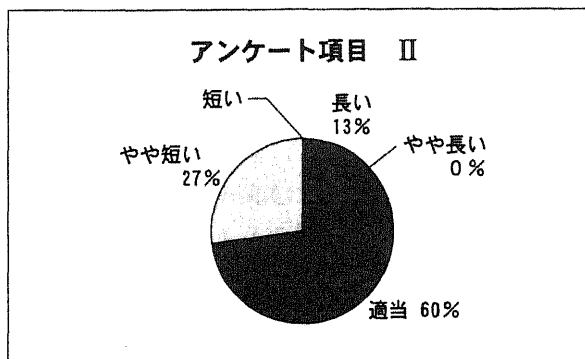
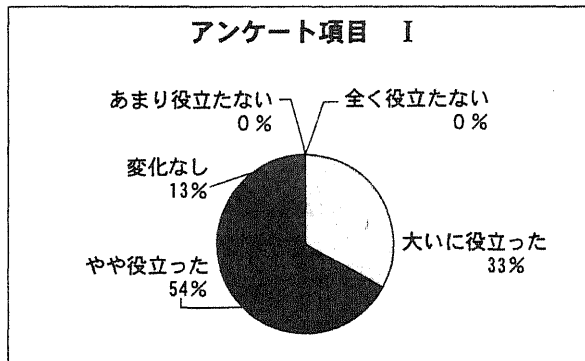
6. 2学期授業に対するアンケート結果

今回のアンケートは、調査研究実習についてのみ実施した。サンプル数は15名であり、項目は以下の3つと調査研究で苦労した点・工夫した点、そして全体を通しての感想を書いてもらった。

アンケート項目Ⅰ：調査研究は日本企業のアジア進出を理解する上で役立ったか

アンケート項目Ⅱ：発表会に至るまでの準備時間は適当であったか

アンケート項目Ⅲ：割り当てられた発表時間は適当であったか



先に約9割の生徒が今回の実習が日本企業のアジア進出を理解する上で役立ったと感じていると述べたが、それはアンケート項目Ⅰの結果による。解答の理由は、以下の通りである。

- ・自分で調べて発表するためにはちゃんと内容を理解していないとできないから、今回実習をしたことでアジア進出のことが理解できた
- ・自ら企業を選び、アジアビジネスの展開・戦略を見ていくことで、興味関心を持ち理解することが出来た多くの生徒が同様の理由を記入していたことから、講義にプラスしてそれに関連した実習を組み込むことが有効であることがわかる。

一方で、変化しなかったと答えた生徒2名の理由は以下の通りである。

- ・企業1つ1つの動向はわかったが、日本企業全体といわれるとわからない
- ・どのような事業展開を行っているか企業ごとにはわかったが、それが日本企業がアジアに進出していく理由には直接つながらなかった

これは、各論の理解はできたが総論がみえてこないという意見と思われる。授業時間の関係もあるが、発表会後のまとめが十分にできず、せっかくの研究成果を生かし切れなかったなかつた点は否めない。今後は各自が調べた結果をまとめ、全体を考察する時間を十分に取りたいと考える。

アンケート項目Ⅱは、今回の実習時間数について質問したものであるが、概ねちょうど良かったようである。しかし中には発表の資料やパワーポイントの作成が授業時間中に終わらず、放課後残って作業している生徒も数名いた。発表会の出来も考えると、発表の準備・練習という時間を別に1時間とっても良いと考える。

反対に、アンケート項目Ⅲによると、発表時間が短く感じた生徒が多数いた。その理由は以下の通りである。

- ・4分以内ということ意識して、早口になってしまった。みんなも何だか慌ただしかった。あと1分あった

ら余裕を持って発表できたと思うし聞く側もより理解できたと思う

- ・もっと発表したいことがあったけど、時間が足りず言えなかった

今後は作業時間とそれに対する発表時間の配分が適正になるよう配慮したい。

以上3つの項目以外に、フリー解答として調査研究で苦労した点と工夫した点を質問した。その主な結果は以下の通りである。

#### ＜苦労した点＞

- ・企業を1社選択するのが難しかった
- ・どのような順番で発表すればわかりやすいか、その構成に一番悩んだ
- ・なかなか資料と戦略が本やインターネットで見つけられず、苦労した
- ・アジア進出している企業のHPは英語だったので、翻訳するのに苦労した

#### ＜工夫した点＞

- ・自分で書いた表や地図を実物提示装置で示しながら、発表した
- ・他の有名同業種企業のデータと比較する形で発表した
- ・自分がまず良く理解しなければと思い、資料を丁寧に読みこんだ

予想通り、情報を集めることに苦労する生徒の姿が結果に表れた。アジア関連や具体的な企業分析のビジネス書は多数出版されているが、値段が高い上大きめの書店でなければ入手が難しい。また図書館でもある程度の規模でないと、最新の書籍がそろってないことが多い。これに関しては、授業者自身が学校の図書館と連携して対応を図る、もしくは各種団体、企業の提供する資料類をあらかじめ収集しておくなどの対策をとる必要がある。工夫した点では、発表ということを意識しての努力がみられた。レポート提出にはないメリットがこういう点にも現れており、今回のテーマを実習形式で行ったことは成功であったと考える。

## 7. 今後の展開

以上が1学期2学期に行った授業内容及びその考察である。この授業の最終的な成果は授業終了後に改めて検討したいが、1学期と2学期を通して、アジアに興味を持ちアジアを知る段階はクリアできたと考える。その点を踏まえ、3学期はこの科目の総仕上げとしての意味合いを含め、フリーテーマによる調査研究を行う予定であ

る。これまでの学習をしっかりとした形でまとめ、生徒の中に科目最大の目的であるアジアの一員としての意識を持たせると同時に、ビジネスで活躍できる能力の下地を確実に築きたいと考える。

## 【参考文献】

みずほ総合研究所アジア調査部

2003『現地取材版アジア経済2003』中央経済社  
丸山恵也

1997『東アジア経済圏と日本企業』新日本出版社  
峰如之介

2003『中国にホンダを立ち上げた男たち』PHP  
今川瑛一・井草邦雄・平均大祐

1994『新版東南アジア経済Q&A激動を読み解く』  
亜紀書房

吉原久仁夫

1999『なにが経済格差を生むのか』NTT出版  
平田潤・平塚宏和・重並朋生

2003『ネットワーク型発展のアジア21世紀の中国、  
NISE、ASEAN』東洋経済新報社

ニュービジネス協議会 編集

2002『ニュービジネス白書2002版』ニュービ  
ジネス研究所